事例９　単元「おはなしをつくろう」

自閉症児のことばの指導　～自ら取り組む気持ちを育む～

国語科　第１学年
石川県立総合養護学校小学部

１　事例の概要

本学年では、国語・算数の個別学習の時間を毎日帯状に２０分間設定している。本学級は教師１人が児童２人を同時に指導する形態で、「個別の教育支援計画」及び「個別の指導計画」の目標達成に向けて、個々の教育的ニーズに応じた具体的な支援を行っている。本事例は、集団参加が苦手で学級活動などに参加できなかった本児が、発達段階に応じた課題設定や課題への見通しがもてるような支援をとおして、次第に課題学習に自ら取り組めるようになり、国語・算数の基礎的な知識・理解の向上が図られた実践である。

２　実践内容

⑴　個別の教育支援計画からの流れ

①　入学時の様子

本児は、見本を見てひらがな文字チップで自分の名前を構成できるが、一文字ずつの読み書きは困難である。慣れた大人にはクレーン動作（＊）で、ごく身近な場面では単語で要求を伝えることがある。初めての場所や活動に抵抗を示す。着席行動が苦手で、机上での課題への取り組みが困難である。

②　学習のめあて

５月に行った知能検査や発達検査の結果、文字理解等言語に関しては、発達段階は高くなかったが、本児は文字やことばに関心をもっており、認知面を高めるためにも言語指導は重要である。そこで、国語科の【年間のめあて】を以下のように設定し、学習全般における指導目標は、「主体的に課題に取り組む態度の育成」とした。

- **ひらがな（清音、濁音、半濁音）が分かる。**
- **身近で簡単な単語をひらがな文字で書く。**
- **身近な事柄について二語連鎖を理解し、二語文の言語表出や単語カードでの構成ができる。**

前期は、「ひらがな文字の理解（読み）」「絵カードを見ての二語文での言語表出」を重点として指導したところ、これらの目標はほぼ達成し、始業時には自ら着席するようにもなった。

後期はめあてを「理解語彙の増加」「ひらがな文字の書写」「簡単な三語文や四語文の表出」に修正した。学習には毎回意欲的に参加し、身近な漢字の読み書きにも関心を示すようになった。

⑵　指導上の工夫点

授業では、設定目標の異なる児童を同時に指導するため、それぞれの児童が見通しをもって取り組めるよう、以下の点に配慮した。

①　教材の選定

・身近で親しみがあり、生活に活かせるものを用いる。
・具体物を用い、視覚的に分りやすく示す。

②　学習活動の課題

・一人でも達成可能な課題、教師が援助して達成できる課題、新たに教師と学ぶ課題などを組み合わせる。

③　課題と順番を視覚的に提示

・順番を示す数字カードとともに、教材の写真カードまたは実物を机上に配置する。

・これから取り組む課題と終了した課題を置く場所を決めておく。

④ 身振りサインと音声の同時提示

・言葉の意味理解を補助するために、マカトン法（＊）を基準とした身振りサインを言葉に添える。

・音声言語と身振りサインは同時に提示し、理解が進んだら身振りサインは消去していく。

Ｂ－１　設定した目標　Ｂ－２　教材例（具体物）

Ｂ－３　課題の提示例　Ｂ－４　＊語句について

３　指導の実際

時間	学習活動	教師の支援
1	1 あいさつする。本時の課題を知る。	・教材を順に指さす。
5	2 ひらがな文字の書写の練習をする。	・正しい筆記用具の持ち方になるように部分的に身体補助する。
5	3 三語連鎖の文を構成する。 ①絵カードを見て、三語文を単語カードで構成する。	・予め助詞の記入してある文構成枠を提示する。 ・主語、述語などカテゴリーごとに分類して単語カードを置いておく。
8	4 四語連鎖の文を構成する。 ①教師の四語文を聴いて、それに応じた絵カードを選ぶ。 ②絵カードを見て、四語文を単語カードで構成する。	・何枚かの絵カードの内容を身振りサインとともに伝え、内容に応じたカードを選ぶよう伝える。 ・絵カードの内容を音声で文章化し、文構成枠に主語から置くことを示範して見せる。
1	5 あいさつする。	・一人で構成するよう促し、見守る。

４　成果と課題

Ｃ－１　指導案　Ｃ－２　教材例（絵カード）　Ｃ－３　教材例（四語文構成）

⑴　成果

入学時から関心のあった題材（時間割名）を課題に取り入れたことで、個別学習に取り組みやすかった。学習によって本児は日課を理解し、自己の行動にも見通しがもてるようになってきた。また、発達検査や行動観察などにより、おおよその発達段階を把握し、課題を選定するとともに、本児にとって少し難しく「頑張ってできた」という達成感が得られる課題に重点をおいたことにより、学習への動機付けに効果的であった。課題の成否については、明瞭な教師の声かけや表情、本児が好むベルの音などで分りやすく伝えるように努めた。さらに、自分の活動をフィードバックしやすい教材を工夫したことにより、本児なりに試行錯誤して努力する様子がうかがえた。

学習活動全般において、本時の課題の提示、終了した課題の片付け、本時の活動の終了などに一定のルールを定めたことは、自閉症の本児には見通しが持ちやすく、主体的な取り組みを促す要因であった。

集団はもちろん、教師との個別の課題にも抵抗を示していた本児が、「わかる」楽しさを感じ、さまざまな場面で自ら活動に参加できるようになった。それに伴い、言語の基礎的な力が向上し、コミュニケーションや思考が豊かになりつつある。さらに情緒が安定して、国語のみならず他の場面でも知識や技能を吸収している。

⑵　課題

児童の主体性を育むためには、個に応じた支援が重要であり、さらに実態把握と課題設定を適切に行う必要がある。また具体物などを用いた教材は、課題の取り掛かりに効果的であったが、さらに意欲を引き出す題材や教材を探っていきたい。

理解し表出できる語彙が増え、コミュニケーションの力が向上してきた本児であるが、今後の生活に必要な抽象的な語彙や、より複雑な文章などの理解と表出に向けて、さらに細かなステップを踏まえた指導を継続していく必要がある。